

別冊

ジャンケン

ダイジェスト

武藤 晃司
服部 正平
松沢 慶
広田 圭司
有村 佳純
江藤 泰司
飯尾 哲也
鈴木 秀幸

祖父江 知宏
谷 誠
谷 佑樹
上田 隆洋
星野 良樹
ホットショット境田
猿井戸 学
広田 司

塩原 龍男
小本 正剛
金田 治
馬場 英夫
和田 俊哉
竹内 正信

生まれ。ばれた、50年
まで呼成。同年及び
生ムラでのポイト獲
市ースパーに
府ネドるよ
甲クンけらる
梨ニグにお
山の年ンに
年」7ズン
5王5ーズ
2明。シ
9動。年
1不選手年

属して無名の選真の虫ま休に一の質いう大会
全的いた。29歳拳の快念ンてっはて、しでの最
国てい名選手田ヤとなむおいに対齡勝
属は無名の選真の虫ま休に一の質いう大会
勝は無名の選真の虫ま休に一の質いう大会
、年練習も全一のとい大
中、完ビから8は
、夕者に歳

「彼の前では冗談もいたえな「（服部正平）とい
った。妻に合ござ記いた拐事優、見婚後
」申し開幕はだ誘の事ら面、た。正さん（服部正平）も、武藤さんには足
ズン開から境子がそ見語、り、た。正さん（服部正平）も、武藤さんには足
席か心息と、一切また、り、た。正さん（服部正平）も、武藤さんには足
な息と、一切また、り、た。正さん（服部正平）も、武藤さんには足
た息と、一切また、り、た。正さん（服部正平）も、武藤さんには足
収は一切また、り、た。正さん（服部正平）も、武藤さんには足
りも多た。正さん（服部正平）も、武藤さんには足
い「ぼくも正さん（服部正平）も、武藤さんには足
沢慶）」

も。失てにジか
で。いで床「い
親す年にお病のな
け出1にたんは
付進か台しケで
名へ僅舞とンち
の界りう朧ジャ打
男政よいう朦ジ舌
長はに。ともはの
の藤事る。政識藤だ
沢武祥せ国意武た
松、不みを。は
、後のて感るたれ
女た書し任なうそ
長し秘た責く請。
の退。果と亡をう
部引任を感じり世い
服に就き義よ辞と
は年に咲正にとた
藤3事りのん、っ
武6知返そがは逝い。
県事肺とまた

服部 正平

1928年静岡県磐田市生まれ。

アマチュア時代からその実力は広く全国に知れ渡り、高校では3年連続の日本一という快挙を達成している。高校卒業後、名門NACに所属、名コーチ西部十三の指導を受け、本格的に才能が開花する。48年、当時の最年少記録でジャパンカップのタイトルを獲得。51年及び55年に年間最優秀選手賞を受賞。

小柄で猫背な体から大きな動作で繰り出される独特のフォーム、アッパーカットのような派手な勝利パフォーマンスなど、気持ちを全面に出したスタイルで人気を博す。ピンチになると得意のチョキを連発し、試合の流れを強引に引き寄せ、全力で勝利をもぎ取っていく様は、多くのファンを魅了した。

愛嬌のある表情やサービス精神に溢れる性格からマスコミの受けもよく、記者の間では、「ネタに困ったら服部に聞け」が共通の認識としてあった。重要な試合の前日記者会見は彼の「ショー」になることが多く、会見場に着流しで現れたり、「明日の試合、最初の10回の手合いは全てチョキでいく」と宣言したこともあった。しかしその性格故にしばしば軋轢を生むこともあった。56年、57年と、服部は一つの主要タイトルも獲得できず、スランプに陥った。更に肘の怪我也重なり、紙面には服部引退説まで躍った。58年ジャパンカップで見事復活優勝を遂げると、その記者会見で服部は、不調の期間に自分のことをこき下ろした新聞の名を読み上げ、「皆様のご期待に沿えず、大変申し訳ございませんでした」と頭を下げた。彼の考えた最も嫌味な仕返しだった。

服部のキャリアのハイライトといえば、やはりその58年ジャパンカップ決勝、対武藤戦だろう。その年、シーズン序盤から服部の調子は今ひとつで、真田記念、ゴールドトーナメントと芳しい結果が得られなかった。すると彼は11月の鳳凰杯を回避、ジャパンカップに照準を合わせ、英気を養う。しかしジャパンカップが開幕しても思うような試合運びができない。1回戦からフルセットという厳しい入り、準々決勝では3度のゲームポイントを凌ぎ、相手のミスに助けられてようやく勝ちを拾うなど、危なげなく勝ち進む武藤とは対照的に、綱渡りのような連戦を強いられた。日頃から「勝つ為には何でもする」と豪語していた服部は決勝前日記者会見にて、「武藤の時代は終わった」、「彼には勝利への執着が足りない」などと、私生活では友人でもある対戦相手を挑発。その表情は疲労からか目が落ち窪み、翌日の新聞の見出しには、「不動明王か死神か」とまで書かれた。試合当日、記者室でのオッズは7対3で武藤。序盤はその見立て通りの展開となる。2セットを立て続けに取られた服部は、第3セットも武藤のペースを乱すこともできずに落とす。服部はコーチの反対をおして肘のサポーターをはずし、失えば後がなくなる第4セットに臨む。序盤リードを許すも何とかポイントカウント7-7に追いつくと、服部はタイムアウトを取る。

「あれ？ という感じでした。こちらが逆にタイムを取ろうとしていたので」（武藤）

服部はサークルを出るとベンチまでも戻らず、その場にしゃがみこんで頭を抱える。会場からはその姿を見て嘲るような笑いさえ起きる。

「記者席でも笑いが起きましてね。明日の写真はこれだなんて、他の新聞社の人とも話していました。武藤の勝利を確信していましたから」（渡辺正俊、当時週刊ジャンケン記者）

服部はそのままじっと動かず、会場はそれを見守る。その間およそ3分。

「場内の雰囲気が変わっていくのが分かりました」（武藤）

ブザーが鳴ると、服部は飛び跳ねんばかりに勢いよく立ち上がると、給水もせずにサークル内に戻っていく。

「歓声が沸いたんですよ。服部コールも聞こえて出て」（渡辺）

「最初は正直、（観客は）ぼくのことを応援してくれる雰囲気だったんです。前日の記者会見のこともありましたし。だから、（服部が）立ち上がったときの会場の反応を見て、ぼくも怯んでしまったところがありました。これは流れが変わってしまったなと」（武藤）

「サークルの外で試合の流れを変えるなんて初めて見ました」（渡辺）

会場を味方に寝返らせた服部は得意のチョキで2ポイントを連取してそのセットを取ると、怒濤の5セット連続奪取、3年振りのジャパンカップ優勝を成し遂げる。

服部はその試合で右肘の症状を悪化させ、翌年のシーズンの半分を棒に振る。その年のジャパンカップ準々決勝で敗退するとそのまま引退を表明。その後は所属していたNACのコーチとして尽力する。

「時には厳しく、時には優しい愛のコーチでした」（山田与志男）

89年、肝臓癌により死去。

松沢 慶

1931年神奈川県川崎市生まれ。父は松沢近次。59、60、61年ゴールデントーナメント3連覇。56年及び59年年間最優秀選手。武藤晃司、服部正平と共に「三巨星」と称される。

父の影響から8歳でジャンケン始める。ジュニアの大会で数々のタイトルを獲得し、周囲からもプロ入りを望む声が聞こえる中、中学卒業を機にジャンケンを休業、大学への進学を見越して高校はジャンケン部すらない進学校へ入学する。大学では建築を専攻、主席で卒業すると、改めてプロチームの入団試験を受け、22歳でプロジャンケン選手としての道を歩み始める。プロとしては遅いスタートながら、父譲りの美しい手筋と立ち居振る舞いでめきめき頭角を現すと、55年にゴールデントーナメント優勝。プロ入り僅か2年目での4大会のタイトル獲得は当時の最速記録である。

「ジャンケンが人生の全てだ、なんて人は気持ち悪くて仕方がない」

松沢が大学進学を希望した主旨を、当時周囲の者は親の七光りを嫌ってのものだと捉えていたが、実際は単に引退後の生活の不安からだった。彼にとってジャンケン界への興味とはプレイヤーとしてのそれであって、解説者となった父のように引退後何らかの形でその世界に残るという選択肢は、彼のセカンドキャリアとして考慮の外に置かれていた。

松沢は独特のジャンケン観を持っていて、「ジャンケンは頭と心の競技」と捉え、ジャンケン選手としての成長の為に「頭と心に良いことをすべきだ」としていた。その為、食事や飲酒の節制はほとんどせず、肉体の鍛錬は太らない為のワークアウト程度に留められていた。朝には必ず鰻を食べ、弁当に唐揚げを詰め込んだ重箱を持ち歩いた。アルコールはあらゆる種類を試し、泡盛をスコッチとビールで割ったものが最も「頭と心に良い」ことを発見すると、毎晩それを数リットル飲んだ。肉は1日500グラムは平らげ、主だった試合会場の近隣にはどこにも鼻頂の焼肉店を持っていた。米やうどんなどの炭水化物も遠慮なしに食べた。何よりの好物は甘いもので、大福、ロールケーキ、アイスクリームをそれぞれ1日1個は食べ、トーストに蜂蜜とシナモンパウダーをふりかけた特製サンドを、毎晩寝る前に欠かさなかった。また1日の喫煙本数400本以上というヘビースモーカーとしても知られた。試合前になると本数が加速度的に伸び、係員が控え室に呼びに入ると、煙で部屋中真っ白だったという。

62年、31歳にして待望の長男が誕生する。妻の智子は松沢より7歳年長で、半ば諦めかけていたところでの吉事だった。しかし、生まれてすぐにその子どもに心臓の障害のあることが判明する。松沢は全ての大会への出場をキャンセルして看病に努めるが、子供は1歳の誕生日を待たずに亡くなってしまう。

以降、松沢は練習に復帰するも試合をする状態とは程遠く、失意の日々を送る。ある日、妹の朋子が、「あなたにはジャンケンがあるじゃない」と励ますと、「それが？」と鼻で笑った。

「昔からひょっとして、というのはあったんです。智子さんとも心配してて。でもそのとき、ああこれはもう止められないかもな、彼の好きにさせてあげるしかないかもな、って」

63年2月、松沢は服毒自殺を図る。一命を取り留めるも肝臓に後遺症が残り、入院を余儀なくされる。同時に鬱病の治療も開始される。同年、武藤晃司の主催するチャリティー大会にゲストとして招待を受けるが、参加を断る。その返信の手紙には不参加の理由として「あなたとは思想が違いますから」と書かれていた。翌年の夏にはいくらか回復の兆しを見せ、気分が良いときには笑顔を見せるまでになる。発作的危険行動の可能性なしとの判断から一般病棟へ移った3日後の朝、中庭で松沢の遺体が発見される。屋上からの飛び降り自殺だった。

都内で行われた葬儀にはファン約3000人が沿道を埋め尽くした。弱い秋雨の中、松沢のトレードマークであったネクタイと同じオレンジ色の旗が至るところで振られた。

広田 圭司

1940年東京都江東区生まれ。

史上に燦然と輝く、ジャンケン界の「神様」。ジャパンカップ7連覇を含む9度の優勝、3度のグランドスラム達成、7度の年間最優秀選手選出、79年ジャンケン界初の国民栄誉賞受賞。現役時代に獲得したタイトルの数は実に203。

ジャンケンの歴史は明らかに「広田以前」と「広田以降」に分けられる。それまでのジャンケンは、対戦相手の誰に関わらずまず自分の技量を高め、それを持ち合い競い合って雌雄を決する競技という風潮があり、決まった手筋の流れや手合いの型などが重視されてきた。広田はそのジャンケンの世界にデータ分析の概念を本格的に導入、対戦相手の手筋の研究に積極的に取り組む。広田は「手筋の流れ」とうものに各選手特有の癖があることに着目、その個人差を分析することで相手の手を読むことができると考えた。広田も松沢慶と同様にジャンケンを「頭と心の競技」としたが、松沢は「心」に比重の大きい考え方だったのに比べ、広田の場合は明らかに「頭」に重きを置いたものだった。彼は対戦選手の過去の試合データを集積すると、具体的に様々なパターン（例えば、チョキを2回続けてグーで応戦した場合、次の手は何か、等）を想定し、それを自分の手筋と重ね合わせて試合のプランを練るという作業を、コンピュータもない時代に毎試合こなし続けた。

彼はこの方法をジュニアの頃から実践していた。しかしジュニアといえば相手は子供、核となる手筋の特徴がそれほど現れておらず、広田はそのカテゴリーではあまり目立った成績を残せなかった。しかし55年に父・広田六五郎の所属していたADOに入り、本格的にプロとして活動するようになると、その手法の価値が徐々に証明されていく。関東リーグでは3連覇を達成するなど、58年に鳴り物入りでトップトーナメントに参加する頃には、「広田六五郎の息子」としてではなく、「実力のある若手」として認知されていた。63年にジャパンカップを獲ると、彼の手法は瞬く間にジャンケン界の新たな潮流として受け入れられる。

彼の強さを物語るエピソードは数え切れない。69年鳳凰杯ではたったの1セットも取られずに優勝するという「完全優勝」を完遂し、その1回戦では僅かに6ポイントしか与えていない。翌年の真田記念の2回戦ではグーとチョキだけで勝ってみせるという離れ業をやった。また68年から70年まで丸2年無敗という記録を作る。年間に20以上のトーナメントに出場して一度も負けなかったというのはまさに驚異的としかいいようがない。

74年のジャパンカップ9度目の優勝を置き土産に、彼は引退を宣言する。そして「ゴルフしかやらなかった」という2年間のブランクの後、77年に1年間の期限付きで現役復帰。四大大会のタイトルこそ得ることができなかったが、中部クラシック、朱雀杯などで優勝、広田健在を見せつけた。

79年にジャンケン協会理事に就任、ジャンケン界の近代化に取り組む。90年から3期に渡って会長職を務め、その間にビデオ判定の導入やロイヤルリーグの創設を実現。勇退後はADOの会長としてチーム運営に力を注ぐ。

「どうせ死ぬならチョキで目を突かれ、パーで平手打ちを食い、グーで頭を殴られて死にたい」（北北西新聞95年4月8日）

2017年、胸部の血管狭窄症で入院。そのニュースは当時開幕中だったジャパンカップよりも大きなニュースとして取り上げられた。妻は前年に亡くなっており、娘の百合が看病にあたっていた。ある日の明け方、広田はふと目を覚ますと、「これで司と会えるかな」と呟く。無神論者の百合は、それはどうだか分からないと真面目に答えてしまう。「お前はつまらん娘だよ」。これが最後の言葉だった。2018年4月、心筋梗塞により永眠。

「『強い』のは広田だが、『美しい』のは有村だ」（江藤泰士）

1940年神奈川県横浜市生まれ。

そのエレガントな身のこなし、左手から繰り出される繊細な手筋、「王子」と呼ばれるほどの端正な容姿、しかしツボにはまったときに見せる激しい攻め。プレースタイルや成り立ちの違いから、「陽の広田、陰の有村」と対比されたが、ジャンケン選手の2世として生まれ、英才教育を受けて育った広田とは違い、貧しい母子家庭で育ち19歳まで所属するチームすらなかった苦労人・有村を、世間は圧倒的に支持した。広田ファン以外は全て有村ファンだといわれたほど、当時最強といわれ「神様」と崇められた男と人気を二分した。彼の愛用した青と白のストライプのネクタイは大流行し、あるジュニアの大会では出場選手の半分以上がサウスポーという現象まで起こした。しかし、有村はその人気に見合うだけの十分な成績を収められていない。彼が獲得したビッグトーナメントのタイトルは、66年の鳳凰杯ただひとつである。

有村の最大の不運は、同年代に広田圭司がいたことであろう。2人は誕生日も一緒の同い歳である。有村は広田と通算27度対戦しており、勝ったのはたった1度だけだった。有村は広田のジャパンカップ7連覇のうち、5度をファイナリストとして目の前で見ていた。うち、70年の決勝は有村が最も益平伝右衛門像に近づいた年ではないだろうか。

有村はその年、真田記念と鳳凰杯で広田に敗れていた。どちらもフルセットでの惜敗だった為、世間も「今度こそは有村が」、「広田の連覇を止められるのは彼しかない」との期待を込めていた。決勝前における勝者予想の比率は有村6の広田4だった。

決勝戦序盤、有村の気迫が優勢を呼ぶ。第1セットを落とすものの、第2セット、第3セットをフルカウントで寄り切ると、続く第4セットも奪取、いつもは冷静な有村がガッツポーズを連発する。第5セットも優位に進め、迎えたポイントカウント7-3の場面、有村は左肩に違和感を覚える。ドクターが入り試合が大幅に中断すると、会場には「またか」という不安が広がる。怪我がちだった有村は過去にも左肩痛により試合を棄権したことが幾度かあった。しかし、有村は今度ばかりはと棄権を申し出ない。コーチの説得に対して何度も首を横に振る姿に、観客席からは声援が飛ぶ。15分の中断の後に試合は再開されるが、流れは完全に変わってしまっていた。有村はそのセットを1ポイントも積み重ねることができずに失うと、次のセットも頭から3ポイント連続で奪われる。コーチの判断でタイムアウトが取られ、そのまま棄権。ベンチに呆然と座り込み、涙を堪える有村に対して会場からは万雷の拍手が送られた。

「（優勝を）諦めてはいませんでした、その覚悟はしていました」（広田、試合後記者会見）

もしあのとき有村の左肩が万全であれば、もし同じ時代に広田がいなければ。勝負の世界に「たら、れば」はない。

75年、広田の1年遅れで現役を引退。解説者として第二の人生を歩む。後年、ある雑誌のインタビューで、広田圭司が同時代にいたことをどう思いますか、という質問に対して、「感謝しています。彼がいなければぼくもあそこまで成長できなかったでしょうし、また彼がいなくても、ぼくは2位の賞状を集めていたと思う」と述べた。

79年10月、後天性免疫不全症候群にて死去。息を引き取った日の夕方、各紙号外が出た。「孤高のサウスポー」（日産新聞）、「無冠の英雄、逝く」（北北西新聞）、「記憶の男、安らかに」（日本新報）。翌日の鳳凰杯開幕式では、彼の死を悼んでの黙祷がプログラムに含まれた。

1932年北海道札幌市生まれ。作家、ジャーナリスト。72年からジャパンカップ決勝のテレビ解説を担当、その鋭い洞察とユーモアに富んだ名解説で、ジャンケン人気の向上に大きく貢献する。71年「全肯定／全否定」で我ら批評家賞、75年「隣の芝が燦々と輝いている」で山田山男賞、85年「とはいきれない時代」でジャンケン研究協会賞受賞。86年にジャンケン協会功労賞を受賞。ジャンケン協会名誉会員。

子供の頃の愛読書は益平伝右衛門の伝記。当時は「負けた記憶がない」ほどジャンケンが強く、自然にプロを志すようになる。親の反対を押し切って青森の名門高校に入学。しかし、「田舎の高校のくせに強い奴ばかりだった。自分より上の奴なんてそれこそ佃煮にするくらいいた」環境ですっかり自信を失いプロの道を断念、勉学に励み、東京の大学へ進学する。大学時代にジャンケン選手への思いが再燃、プロチームのテストを受けまくるがことごとく失敗。「諦めたというよりも判決を下された気分だった」。大学卒業後、新聞社に入社。文化部に配属され、「先輩や上司への姑息な取り入り」が功を奏してジャンケン専門担当となる。62年ジャパンカップの武藤晃司の復活優勝をスポーツ欄で取り扱い、それまで将棋や囲碁と同等の趣味・娯楽として扱われていたジャンケンが、野球や相撲と並ぶ国民的スポーツイベントとしての地位を築ききっかけを作る。99年のジャンケン協会100周年の記念講演の中で、当時の会長・広田圭司は、日本のジャンケン史における分岐点のひとつとしてこの江藤の功績を連ねている。70年に退社後、専門誌「ジャンケングラフィック」の創刊に参加。72年にフリー。

「ジャンケンと沢庵と番茶。それさえあればいい。順位もその並びだな」（ハンス・ニーダーマン「江藤泰士という名の鬼」）

酒も煙草もやらずこれといった趣味もなかった彼にとって、ジャンケンは生活そのもの、情熱を傾ける唯一の対象であった。年間に1000以上の試合を見、生涯で残した観戦記録ノートは200冊を超えた。地方の小さな大会にも足を運び、何千人という選手の情報を頭に蓄えていた。63年に結婚、同年に長女が誕生すると、「女性初のジャンケン選手を育てる」と意気込むが、妻からの猛反対で断念する。長女の名前は初。益平伝右衛門の飼っていた犬の名前に由来する。76年ジャパンカップ決勝、小本正剛の逆転優勝の瞬間に放送席で「畜生！」と叫び、八百長事件への関与を疑われて聴取を受ける。本人曰く「あの恍惚の渦の中心にいた小本への抑えがたい嫉妬を感じた」。

選手を見る目は図抜けていて、周囲からの評価も高かった。当時は中堅選手の域を出なかった祖父江知宏の時代の到来をいち早く予見し、まだ高校生だった竹内正信を「化け物」と評価した。グラスホッパーからはスカウティング部門の責任者として正式に就任要請を受けている。現場からの誘いにすぐに飛びつくかと思いきや、「全体が俯瞰できる現在の自由な立場を捨てるのは惜しい」として断りを入れている。選手からの人望も厚かった江藤は、コーチの就任も度々打診されている。

江藤の発言力は年を重ねるごとに増し、各メディアが節々で彼の言説を求めた。八百長問題及び田舎チョキ問題に関しては選手側を、77年ストライキ危機では協会側を擁護する発言をするなど、中立の立場としてジャンケン界に提言し続けた。83年ジャンケン協会第三者委員会委員に就任。当時から議題にあがっていたロイヤルリーグの設立に関して、「無意味な市場の肥大化を招く」として反対の立場をとり、翌年には委員の座を下りている。常にジャンケン界全体の利益に配慮した言動を示す姿は、まさに「ジャンケン界の良心」であった。

飛行機嫌いの江藤は、全国を回るにも必ず電車を利用した。85年、真田記念の開幕3日前に義理の父親が急逝する。開幕戦のテレビ解説を任されていた江藤は列車移動では予定を組めなかった為に止むを得ず飛行機の切符を手配する。番組のプロデューサーからの代役を立てるとの申し出にも「必ず行きます」と答え、悲痛の底の妻を説得した。7月12日、江藤泰士を乗せた日本航空123便は羽田空港を飛び立ち、群馬県高天原山に墜落。4日後、江藤の遺体が確認された。

「父の笑顔は、恐らく兄弟の誰も見たことがないと思います」と飯尾の長女・曜子という。

どんな不利な試合展開に陥ろうとも決して表情を崩さず、負けても冷静沈着、勝っても派手に喜ばない。飯尾哲也は「菩薩」の愛称を授かっていたが、1977年にグランドスラム、同年年間最優秀選手選出などの成績を収めても、当時は彼以上の強さを示せなかった祖父江知宏、谷誠、小本正剛らに、人気の面では水をあけられていた。77年の専門誌の人気投票では、年間王者ながら7位に甘んじている。

「飯尾哲也の娘、っていわれても、全く誇らしくなくて。『あの能面の娘だろ?』って男の子にいわれたこともありました。妹なんてそれで小学校のとき苛められてて。母が父に話しても、怒るでも悔しがるでもなく……。正直、何を考えているのか、家族でも分かりませんでした」。

しかしそのポーカークフェイスは、ジャンケンの試合においては有効だった。77年の真田記念の優勝で突然脚光を浴びた感のある飯尾だが、それまでにも着実に実力を発揮していた。21歳でのジャパンカップベスト4進出を皮切りに、76年までに4大会では4強に6度、8強には8度勝ち進んでいる。また春の前哨戦での好成績も特徴的で、75年シーズンには4月から6月の3ヶ月で8つのタイトルを獲得、また地元のカネコクラシックでは6連覇という快挙を成し遂げている。

77年ジャパンカップのタイトルは、本人にとっても悲願であっただろう。決勝戦で田尾勝に5-2という大差で勝利すると、飯尾は恐らく後にも先にも初めてと思われるガッツポーズを見せる。

ほとんどインタビューというものを受け付けなかった飯尾のマスコミ嫌いは有名で、80年ゴールドトーナメント決勝の前日記者会見も仮病で欠席するほどだった。また、チームメイトともプライベートでの交流は皆無で、彼が結婚したことをコーチですら3年の間知らされなかった。引退後はジャンケンの世界には全く未練を残さず、引退発表の翌月にはあっさり妻の父親の会社に入社している。

その印刷会社を僅か2年で退職すると以降、飯尾は何の職にも就かなかった。現役時代の貯蓄が底をつくと、5人の子供たちからの援助に頼った。その頃の彼の生活は、外出はほとんどせず、日がな一日庭にやってくる猫を眺め、一日に一度きりの食事もその縁側でとった。立ち上がるのはたまの小用のときだけだったが、それすら億劫になり、妻におむつを買いにいかせようとした。妻は、それだけは、と泣いて懇願した。

88年、都内のホテルで催されたジャンケン協会主催のパーティに、飯尾もゲストとして招待された。しかし、当日現れた飯尾は関係者を困らせる。協会が用意したタキシードの肩にはふけが積もり、口臭・体臭が周囲の者を辟易とさせた。元来無精な飯尾は何ヶ月も風呂に入らないことがざらにあったのだ。またところ構わず放屁し、鼻を掘ってはテーブルクロスに指先を擦りつける姿が見受けられ、飯尾はたった30分で「都合」により帰されている。

2005年、金の無心に疲弊した妻が過労により亡くなる。

「納棺も終えて家に帰ると、父は喪服姿のまま縁側に腰掛けていた。私は母の死にも表情ひとつ変えない父にだんだんと腹が立ってきて、母の死に対する悲しさも相まって父を怒鳴ってしまった。『あなたのせいだ』とか、もっとひどいことといったかも分からない。（中略）

私が台所でお茶をいれていると、縁側から野太い叫び声が聞こえてきた。私は持っていた急須をひっくり返すほど驚き、慌てて声のしたほうへいってみる。すると、縁側であの父が涙を流しているではないか。（中略）しかし、父の表情は泣いているというよりも、その事実には驚いているようだった。目を丸く見開き、口は半開き、頬を伝ってこぼれる涙を、両手で作った椀で受けていた。父はこちらへ振り向き、『何だこれ』と、それまで聞いたことのないような大声で叫んだ」（トマソン曜子「父、飯尾哲也のこと」）

その翌年、飯尾は心不全により亡くなった。

「母がいなくなって、何かと面倒臭くなったんじゃないでしょうか」

「ジャンケンは素晴らしい。たった1回の手合いで宇宙と繋がることができる」（ジャンケンマガジン75年8月号）

1945年愛知県名古屋市生まれ。66年及び71年年間最優秀選手。

71年にゴールデントーナメント、鳳凰杯を続けて獲り、いよいよ「満を持しての真打ち登場」を予感させた鈴木秀幸は、その頃から躁鬱的な性分が災いして、問題を起こすことが増えていった。気分の沈滞しているときと昂揚しているときの差が激しく、マネージャーはどちらにしろ手を焼いた。試合前、控え室でシートに包まり、「出たくない」と駄々をこねたかと思えば、これから対戦しようという選手を相手に、宇宙の膨張について延々と喋り試合開始が遅れたこともあった。睡眠不足が続いた期間に出場した試合で、対戦相手の父親のことを「少女趣味の変態」と決めつけて非難し、控え通路で取っ組み合いの喧嘩になりかけたこともあった。試合に負けた責任をマネージャーに転嫁して机を破壊した直後に、シャワー室で「オペラ歌手のような熱唱」を聞き、その上機嫌ぶりに「お子さんが生まれたんだ」と勘違いした者もいた。鈴木は試合前の儀式として、トイレの一番奥の個室に籠るのを慣例としていた。ある日、その会場でいつも使う個室に先客がいた。彼は通路にも響くような大きな声で怒鳴り散らし、蝶番を破壊するほどドアを殴りつけ、小指の骨を折ってその試合を棄権した。

引退後しばらく鬱の期間が続き、家族は鈴木から目を離さぬよう、「監視シフト」まで作って警戒していた。それまでも一人で栈橋に出かけて行ってパトカーで帰宅したり、戸棚に謎の薬瓶を何本も貯蔵していたりしたことがあったからだ。ある日、居間のソファに腰掛けてテレビを見ていた鈴木は突然むくっと起き上がり、新聞社やテレビ局に電話をかけまくった。翌日、何かと集められた報道陣を前に、突然の復帰宣言を行い、家族を慌てさせた。復帰はもちろん実現しなかった。45歳のときである。

「ジャンケンとはジャンケンのことで、ジャンケン以上のものでもジャンケン以下のものでもない。ジャンケンとは私にとってジャンケンとしか表現することができない。ジャンケン以外の何かで表現できるならそれは既にジャンケンではなく、ジャンケン以外の何かだといわざるを得ない」。これはある雑誌のインタビューにおける、あなたにとってジャンケンとは、という質問に対しての鈴木の答えである。ちなみに掲載はされていない。

彼は確認されているだけで7回の自殺未遂を図り、22回遺書を書いている。

「もし世界のほうが間違っていて自分だけが正しかったとしても、そんな正当性に何の意味があるだろうか」（37歳）
「神様お願いします。もう一度始めから人生をやり直させて下さい。あなたならできるはずです。た易いはずです。あなたの住む宇宙の時間に比べれば、われわれの時間なんてほんの一瞬なのですから」（38歳）

「いくつかの願いをここに書き記します。葬式は行わないで下さい。どうしても行う場合は、遺影を飾ることだけはしないで下さい。（中略）私の死に責任を感じないで下さい。私が死ぬのは私自身の責任であり、私が死を望むようになったのも、同様に私という個の特性に拠るものだからです」（41歳）

「自死とは極めて傲慢な行為だ。死ぬ本人は勝手に楽になり、その後の面倒な処理は全て残された者たちに丸投げしてしまうというのだから。しかも、残された人たちはその作業を、まるで神からの啓示のように、遂行することを義務づけられてしまう」（68歳）

結局彼は98歳まで生きる。秋口、腹痛を訴えて入院。夜になると、ベッドの上で体を揺らし、「死にたくない、死にたくない」と涙を流した。入院から1週間後、孫、曾孫含め総勢28名の親族に見守られて逝く。医師の死亡宣告を受け、病室では拍手が起こった。

祖父江 知宏

「ジャンケンなんて運がいいか悪いかだ。広田圭司は一時期運のいい時代があったってだけだ」（1974年ジャパンカップ決勝前日記者会見）

「オカマと試合するなんてぞっとする。チョキを出してきたらケツの穴をグーで塞がなくなちゃ」（70年鳳凰杯レセプション、組み合わせ抽選により1回戦で有村佳純との対戦が決まったことを受けて）

「今まで見たなかで最もつまらない試合。弱い者同士がやるとああなる」（ジャンケンダイジェスト77年3月号、前年ジャパンカップ決勝の小本一谷戦の感想）

1945年新潟県長岡市生まれ。72年から75年鳳凰杯四連覇、73、74年年間最優秀選手。

大柄な体躯から「巨人」のニックネームでも呼ばれ、「口は悪いが滅法強い」と演歌でも歌われた祖父江知宏は、実のところ大変神経質な男であった。験担ぎの為、試合日の朝にはカツ丼を食べ、赤い靴下を履き、靴紐は必ず新しいものに取り替えた。ネクタイの色は手製のサイコロによって決めており、控え室ではお香を焚き、サークルには必ず右足から入った。誤って左足から入りそうになると、わざわざ数歩退き、歩幅を変えて再度トライした。行きつけの占い師が3人おり、自分なりの占いも研究していた。対戦相手の対策はほとんどせず、「体調が良ければ勝てる」と信じ、彼にとっての練習とはほぼ肉体の鍛錬のことであった。ジャンケン選手には珍しく、専門のフィジカル・トレーナーを雇っていた。

彼の「暴言」は半ば放任されており、実際には敵も作らなかったようだ。それどころか、業界内では人情家として知られた。有村佳純が亡くなった知らせを聞くと真っ先に彼の家へ駆けつけたり、塩原龍男の海外挑戦に際しては金銭的な援助を申し出るなど、信義の厚さは有名だった。彼はトッププロになっても、小学校から所属していた地元の中部トレーニングスクールから移籍をしなかった。ジャンケン界を盛り上げる為の話題作り、というのが彼の口の悪さの真相であろう。

祖父江は「生涯現役」を公言しており、齢40の大台を過ぎても引退の「い」の字もほのめかさなかった。それは彼が欲してやまなかったジャパンカップのタイトルを獲らんが為であろう。しかし86年、そんな意向を無視して彼に病魔が襲いかかる。

現役時代を通して腰に爆弾を抱えていた祖父江は、その年のシーズンが開幕してすぐに休養を余儀なくされる。自宅にて静養していたが、夜も眠れぬほどの痛みを苦しむ。病院で診断を受けると、翌日精密検査を行うという。妻・孝子は嫌な予感がし、夫には内緒で病院に電話を入れる。「もし悪い病気でも、夫には本当のことをいわないで下さい」。神経の細い夫を気遣ったことだ。

孝子の予感的中する。胃癌であった。祖父江には重度の潰瘍だと偽り、緊急に入院の手続きが取られる。

彼は合計3回の切除手術を行うが、孝子と医師は最後まで潰瘍だと騙し続けた。「俺も癌じゃないのか」と疑う祖父江に、「そんなに若くてなるわけないでしょ」と、孝子は呆れ顔の演技をした。祖父江の父、祖父、兄が既に癌で亡くなっていたのだ。

ある日孝子が病室に入ると、祖父江がスポーツ新聞を広げている。見出しに、「祖父江、胃ガン」の文字。祖父江は「胃潰瘍だつてばれたら格好悪いな」と笑った。孝子は「眼球から冷や汗がにじみ出る」ような気分だった。

また別の日、祖父江はベッドの上で電卓を叩いている。今まで獲得した賞金を計算し、「何とか孝子さんに財産が残せてみたいだ」と妻の手を握った。孝子は涙を堪えるのに必死だった。

最後に出場した大会は87年の鳳凰杯。それからおよそ1年後の冬、最後まで医師に出場を懇願したジャパンカップの開幕前日、祖父江知宏は息を引き取る。

1955年千葉県浦安市生まれ。

父に谷八十、叔父に毛利利光、兄に谷佑樹と、ジャンケン人の血筋を一身に受けたサラブレッド。

高校の頃からその才能を発揮していた谷は、18歳でNACに入団する。同じチームの先輩に有村佳純がおり、有村は、「彼の手合いには何かが宿っている」と評し、才能溢れる若者を可愛がった。また、谷も当時の大スターを「偉大な教師」として慕うようになり、やがて2人の関係は友情以上のものに発展していった。22歳で女優の水田梓と結婚してもその関係は壊れることはなく、2人の交友は半ば公認されていた。有村は谷の婚姻の保証人でもある。

76年ゴールドトーナメントで初のタイトル獲得、同年のジャパンカップ決勝では小本正剛との死闘の末の準優勝など印象的な戦いを見せ、やがて訪れる谷誠の時代の到来を、誰もが信じて疑わなかった。

高校時代の恋人が聾啞者だったこともあり、谷はボランティア活動にも積極的に取り組んだ。ある盲学校に特別授業の講師として招かれた際、どうやったらジャンケンに勝てますかという児童からの質問に対して、「相手がパーを出すな、と思ったらチョキを出して、相手がチョキを出すな、と思ったらグーを出すんです。でも、相手がグーを出すな、と思ってもパーを出してはいけません。グーを出すな、と思ったらグーで合わせにいくんです。ここが難しい。グーだけには無闇に勝ちにいいけません」と、独特のジャンケン観を披露した。

また、ファンレターに必ず返事を書くことでも有名で、どんな中傷じみた意見に対しても自分の考えを丁寧に返信していた。同性愛者であることを差別的になじった手紙に対して、「私は構いません。私は構いませんが、私と同様の立場にある方々に対して同様の態度を取ることはこれを機に慎んで頂きたい」と綴って返した。ピンクの封筒に入った彼の手紙を宝物としているファンは多い。

77年の春に左膝の十字靭帯を断裂すると、丸一年試合から遠ざかる。試合のできない苦しみを、「暗闇で目を開けているみたいだ」と兄の佑樹に告白している。翌78年の真田記念で復帰。4回戦まで危なげなく勝ち進み、怪我の完治を印象づける。そして迎えた準々決勝、対飯尾哲也戦。試合は中盤、セットカウント3-1で谷がリードという局面。飯尾はこの日3度目のタイムアウトを取り、ベンチへと下がる。しかし谷はサークルの中に留まったまま、じっと立ちずくんでいる。審判が声をかけると、大丈夫だというふうに手を掲げるが、そのまま前方へ倒れ込んでしまう。額には玉になった脂汗がにじみ、痙攣も起こっていた。会場は騒然となり、担架が競技場内を横断する。谷は救急車に乗せられて病院に運ばれるが、間もなく息を引き取る。死因は原因不明のまま心臓発作と発表されたが、巷では精神安定剤の飲み過ぎによるものという説から暗殺説まで、様々な憶測が飛び交った。以降、病院の正式見解は更新されていない。

大会終了後、告別式が執り行われたが、妻の水田梓は有村佳純の列席を拒否している。

谷 佑樹

1950年千葉県浦安市生まれ。

「怪獣」谷八十の長男として生まれ、4歳からジャンケンの道へ入るが、谷佑樹はそのキャリアの大半を、これといった特徴もない平凡な選手として過ごした。弟・誠が76年ゴールドトーナメントを制覇したとき、兄・佑樹は地方の小さな大会をいくつか獲ったことのあるという程度の、無名選手の一人だった。ジャパンカップで兄弟対決が実現したときも、実況アナウンサーからは「谷誠の実の兄です」と紹介された。

NACの寮生活時代、雀が巣を作れるようにと窓を開け放して床に就くような、心優しい青年だった。その温和な性格は人との衝突や争いを嫌った。75年にチームから半ば「勘当」されて移籍をすることになっても、「自分から（移籍を）志願しました」といい、「今まで支えてくれたスタッフ、家族には本当に感謝しています」と恨み節ひとつこぼさなかった。そんな佑樹は誠を妬むこともなく、純粋に弟の活躍を喜んだ。報道陣に弟の質問ばかりを受けても、「誠は凄い。いつか兄のぼくを超えてほしいです」という冗談を、毎度決まり文句のように付け加えた。誠も5つ離れた兄を慕い、兄弟仲はすこぶる良かった。佑樹が他のチームに籍を置くようになっても、オフには共にトレーニングに励んだ。父の八十は、「あいつは才能がないくせにガッツもない」と漏らしたが、それがジャンケン選手にとっては欠点であっても、人間性の面で劣っていたとはいえない。

78年にその弟の急死に直面すると、約2ヶ月もの間トレーニングもできなくなるほどのショックを受ける。余りの衝撃に、何年も症状を見せなかった喘息の発作が起こるほどだった。11月の鳳凰杯で復帰、げっそりと痩せこけた佑樹の姿に、関係者は引退も覚悟した。しかしそれから谷佑樹の躍進が始まる。翌年の鳳凰杯を準決勝まで勝ち進むと、翌月のジャパンカップを制覇、史上初の兄弟チャンピオンという快挙を成し遂げる。その年には誠も得ることができなかった年間最優秀選手の栄誉を授かっている。授賞式では、「この賞を頂くことは何度も想像しましたが、この場に弟がいないとは考えもしませんでした」と述べた。

自動車マニアだった佑樹は、8台もの車を所有していた。他には何の贅沢もしない夫だったので、妻もその道楽振りには目をつぶった。80年2月、夜半過ぎに愛車のアストンマーチンを運転中、環状7号線でガードレールに激突。怪我人8名を巻き込んだの事故だった。運転手は即死、警察の発表では、激突時の時速は200キロを超えていたという。谷八十は才能溢れる息子を僅か2年のうちに2人とも奪われてしまう。

彼の死後、ある記事が週刊誌に掲載される。見出しは、「仏の谷の裏の顔」。「谷」の脇には括弧書きで「兄」と注記されている。内容は、ジャンケン界では弟思いの人格者とされていた谷佑樹の本音が綴られた日記を入手したというもの。

「ソブエのやつには頭にくる。何をいってもオレが怒らないと思っている。今度いつきたらやつの出自に関していい返してやろうと思う」

「変態の弟を持つ兄の苦悩というものを誰もわかっていない。父ですらその保護者の役目をオレに押しつけてなに食わぬ顔をしている」

「日本人というのが親切で礼儀正しい国民性をもつなどは、いったい誰が言いだしたことだろう。べたべたと人の体に触り、あることないこといいふらし、何の咀嚼もせずにそれらを信じ込む」

後にこれは谷兄弟の末の妹のでっち上げだったことが判明するが、このときに広がった彼の負のイメージは未だに完全に払拭されたとはいえない。

1931年長崎県佐世保市生まれ。60年ジャパンカップ制覇、同年年間最優秀選手。

「行儀良くしていれば、武藤にも広田にもなれた」。当時のコーチ西部十三のこの言葉が、上田隆洋という男を実によくいい表している。三巨星時代真っ只中、その3人を負かしたことのある唯一の選手であった上田隆洋は、私生活では「酔狂」、「変人」、「人でなし」と呼ばれた、ひどく「面倒」な男であった。

「借金取りと一緒に上京した」と本人が回想するように、九州のアマチュア時代から「飲む、打つ、買う」を地でいく生活をしてきた。最初の1年で稼いだ賞金は全てその借金の返済に充てられた。雀荘で知り合った男と高利貸し屋を始め、その副業が軌道に乗り始めると本業のほうは休みがちになった。その共同経営者が会社の金を持って姿をくらますとまたしばらくはジャンケンに専念するようになるが、相変わらず賞金は酒と博打に消えていった。その共同経営者とは「目で合図して俺に上がらせてくれた」ことで親しくなり、「下の名前は聞いたことがない」という程度の間柄だった。賭け事は麻雀を始め、頭に「競」のつくものは何でも好んだ。合法、違法の境界も軽々と行き来し、ときには警察の世話になることもあったが、幸運にも犯歴は残っていない。

一晩に2升は空けるという酒豪で、赤ら顔で試合に出たことも一度や二度ではない。また大変な見栄っ張り、自分が飲むときは大勢を引き連れて町へ繰り出し、借金してまで人に奢った。誰を招いても恥ずかしくないようにと世田谷に大邸宅を購入するが、すぐに借金の抵当に取られてしまった。女性のほうの手癖も悪く、自ら「800人はいった」と豪語した。情事の感想を「まるでグルメ評論家のように」吹聴し、「あそこにラッパがついている」と陰で揶揄された。

当時暮らしていたアパートの隣人一家の16歳の娘、明子との間に子供ができると、周囲の説得もあって身を固める決心をする。が、夜遊びは一向に止む気配を見せず、結婚初夜ですら別の床で過ごした。子供が産まれても平気で店の女を家に上げ、妻に酌をさせ、拳げ句の果てには、「ムードも何もない」と怒鳴り、明子と子供を家から追い出した。夫婦の間には戸籍上6人の子供がいるが、妾の間にも3人いる。7人目に先天性四肢障害児が産まれるが、「でき損ないは俺の子供ではない」と、明子の兄夫婦の籍に入れている。

妻が7人目（実際には8人目）の子供を身籠ると、暴行を加えた上で流産させた。何ヶ月も苦しむ明子を病院にも行かせず、自分のことは棚に上げて妊娠した彼女を口汚く罵り責めた。その妻が32歳という若さで亡くなると、その葬儀の席でも浴びるほど酒を飲み、棺と襖一枚隔てた部屋で卓を囲んだ。弔問客の前で、「あれはなっていない女だった。6人も子供を産んでまるで豚だ」と一升瓶片手に演説を打ち、「まるで鬼畜、犬畜生の大宴会」という感想を出席者に抱かせた。

「(偉大な名選手に)なれるんだよ。やりゃあできるんだ。そんなことは火を見るより明らかだ。そんな当たり前のことをやってもしょうがない。できて当たり前のことやろうってのは、毛の生えた男のすることじゃない」(62年、ラジオのトーク番組にて)

勝つ試合では非凡な手筋を見せるも、それが大会を通じて続かない。試合が負けだすと、目に見えて集中力がなくなり、まるで投げたようにあっさり負ける。71年にはひとつの大会にも出場せず、引退したと思われていた上田だが、翌72年の真田記念に特別招待選手として出場が許される。1回戦、2回戦と勝ち進むと、気を良くした上田は夜の町へと繰り出す。何軒か回り、夜中の3時には30人近い烏合の衆の先頭を上田は歩いていた。道頓堀、戎橋にさしかかると上田は、「見てろお前ら！」の後に聞き取れぬ言葉をいくつか叫び、川へと飛び込む。翌朝、ボートに引っかかった上田の溺死体が発見される。事情を聴取された前日の飲み仲間の一人は、上田のことを「どこかの会社の社長さんかと思った」という。

1972年ジャパンカップ。「神様」広田圭司に決勝で挑んだのは、弱冠19歳の若者だった。解説を担当した「プロフェッサー」江藤泰士でさえ、その若者の情報を何も持ち合わせていなかった。準決勝で鈴木秀幸を下しているとはいえ、その無名選手の実力を皆が量りかねていた。

試合が始まる前までは広田の8連覇はほぼ既成事実だった。会場の雰囲気も消化試合に似た白けたムードが漂い、試合開始まで30分を切っても、会場の入りは8割程度だった。しかしいざ試合が始まると、大方の予想とは全く違った展開を見せる。広田はその若者に常に2セットのリードを許し、10連続でポイントを奪われるなど、終始劣勢を強いられる。終盤の追い上げも虚しく、広田の8連覇の夢は潰える。「完敗です」。広田は一言だけコメントを残し、足早に会場を去った。

1953年、星野良樹は函館に生まれる。父はジャンケン選手だったが、主に地域リーグで活動したセミプロどまりだった。そんな父の期待を受け、星野も自然とジャンケン選手を志すようになる。しかし環境に恵まれず、ジャンケンを始めしたのは高校からだった（地元の中学にはジャンケン部がなく、野球部に所属した）。3年生のときには北海道で4位になっている。東北リーグへの参加資格も得られなかった星野は、プロの道を諦め、地元のホテルに料理人の見習いとして内定をもらう。しかし、最後の大会として参加したジャパンカップの地方予選であれよあれよと勝ち上がり、そのまま前人未到のアマチュア優勝という快挙を成し遂げる。

「奇跡」の優勝の直後、星野の元には各チームからのラブコールが殺到する。その中からヤングボーイズと破格の契約（4年で8000万円の固定サラリー＋賞金の8割）を交わし、星野良樹はプロとしてのキャリアをスタートさせる。翌年真田記念ベスト4、ゴールドトーナメントベスト8とまずまずの成績を上げるが、その後は絵に描いたような下降線を辿る。その年のジャパンカップではアマチュア相手に5-1というスコアで敗れ、前年度王者の1回戦負けという不名誉な記録を作った。74年にはひとつのタイトルも獲ることができず、その責任をとってチームのマネージャーが辞任の憂き目にあっている。「誰でも少しの間、何をやっても勝てる時期というのがある」と馬場英夫はいったが、星野のその時期は長くは続かなかった。

その後も鳴かず飛ばずの日々を送った星野は、27歳で突然の引退。フォークグループ「ベイビーベイベス」を結成し、世間をあっという間に驚かせる転身を見せる。その話題性も助けとなり、デビュー曲「あの娘が働く喫茶店」は週間のレコードチャートで18位を記録する。しかし1年後にグループは解散、82年にジャンケン界に復帰するが1年後にまた引退、「ア・ラ・カルト」というグループを結成し、再び音楽活動に勤しむ。85年からは俳優としての活動も始め、映画「ある視点」では、元ジャンケン選手の犯罪者役を演じている。音楽のほうは84年に「ア・ラ・カルト」が解散すると、「星のよしき」名義でソロとして続けた。

ア・ラ・カルト時代、ある音楽番組で、「ジャンケンは飽くまできっかけというか、ぼくにとっては飛び箱の踏み台みたいなもので、でも踏み台が良くないと、飛び箱も上手く跳べませんよね。それと同じで、ジャンケン選手としての期間はぼくにとってとてもいい経験でした。でも今のぼくにはこれですよ」と語り、D線の切れたギターを爪弾いた。

90年、札幌のホテルで星野の遺体が見つかる。死因は薬物の過剰摂取による心臓発作。数日間部屋から出てこないのを不審に思い、ホテルの従業員が部屋に入ると、素っ裸で床にうつ伏せになっていた。右手にはテレビのリモコン、左手には豚足が握られていた。音の消されたテレビでは、ジャパンカップが放送されていた。

ホットショット境田

1953年岐阜県各務原市生まれ。本名・弘司。80年鳳凰杯優勝、82年真田記念優勝。

「シャモ」というあだ名で親しまれた人気ジャンケン選手。彼が手合いで見せる独特のフォームにはそれぞれ名前がつけられ、巷の子供たちが真似をした。それらはホットショットを主人公にした漫画では「必殺技」と称され、「燕返し（肘を支点にして半円を描くようにして繰り出される手）」、「フェニックス・チョキ（屈んで低くした顔の前で腕を交差させて構え、胸を開くようにして出されるチョキ）」、「阿行のゲンコツ（僅かに跳ねて手刀のように振り下ろされるグー）」、「オロチの脱皮（空手の正拳突きのように出される手。小指が上を向くように腕をねじる）」などの型のできあがったものから、「母の思い」、「シラミ潰し」、「トーテムポール」のような精神的なものまで、48手が紹介された。ちなみにその漫画には、ホットショットの相棒の覆面ジャンケン選手として祖父江知宏が、伝説の名選手で今は仙人という設定で広田圭司が特別出演している。

試合のたびに变える奇抜なヘアスタイルや派手なネクタイも特徴的だった。試合中、余りに激しく動く為に、ネクタイが暴れて手元が隠れてしまい審判の判定に支障をきたすので、シャツの袂の第3、第4ボタンの間にネクタイの先を突っ込んで試合に臨んだ。そのファッションも新しいトレードマークとして定着した。

82年、いわゆる「猿井戸ノート」により選手生命を絶たれると、84年に正式に引退。翌年からラジオのDJを務めながら実業家としての挑戦を始める。まず目をつけたのはジャンケングッズの販売だ。各選手のカードやキーホルダー、お菓子やラムネなど、ジャンケン協会からまったがかるまで、次々とアイデアを商品に変えていった。ボタンを押すと手が出る対戦型のジャンケンのおもちゃは、総計2万個を売り上げた。グッズ販売でそこそこの成功を取めると、その後はジャンケン関係にこだわらず、何にでも手を出した。主だったものでは卵販売、パチンコ台販売、バー経営、住宅販売、温泉旅館経営、墓石の販売、家事代行、雪かき代行、水の訪問販売、漬け物の販売、広告代理店、中古車販売、金庫のリースなど。一時は同時に8つの会社の代表を務め、名刺には「名実業家」と印刷していたが、どれもこれも暗澹たる結果であった。名古屋でビルを購入し、1フロアを「エクストラ・フューチャー」という名の占いのテーマパークを作った大失敗したこともあった。98年には自己破産を申請している。

あるジャンケン関係者が名古屋でタクシーに乗ると、運転手がかつての人気選手ホットショット境田によく似ていた。彼の郷里が高山だったこともあり、運転手の話す岐阜弁にも聞き覚えがあった。「ホットショットさんですよ」と声をかけても、当人はよく間違えられるが人違いだ否定する。降りがけにダッシュボードに飾られていたネームプレートを見ると、「これからも全力でがんばります・さかいだこうじ」と書かれていた。

2度の結婚に失敗したホットショットは、晩年は公営団地で犬と暮らしていた。その犬が閉め出されていることに気付いた保険勧誘員の女性が、自宅にてホットショットの遺体を発見した。餅を喉に詰まらせての窒息死で、死後3日が経過していた。犬はその女性が引き取った。

猿井戸 学

1930年大阪市吹田市生まれ。

工業高校を卒業後に上京、大学に通いながら、名門ADOの特待練習生としてプロのコーチ陣の薫陶を受ける。大学卒業後は製薬会社の実業団チームのアマチュア選手として活動する。現役時代にはジャパンカップ本戦出場を経験したこともあり、主力選手として団体日本一に輝いた経歴も持つ。65年に引退後は、大学や実業団で指導者としての経験を積み、68年にコーチとしてADOに戻る。村田二男などのコーチを経て、69年に広田圭司のセカンドコーチに就くと、ジャパンカップ7連覇を陰から支える。

74年からジャンケン研究センターに籍を置く。大学では統計学を専攻していた猿井戸は、アカデミックなアプローチでジャンケンを捉え直し、この研究センター在籍期間に大きな功績を残す。何十年分にも及ぶ膨大な試合数の手合いデータを分析し、選手が無意識のうちに陥る、一定の手合いが周期的に反復する現象を発見した。これは一般に「ループ」と呼ばれ、今では試合の流れを追う上での視点のひとつとして欠かせない要素である。また、選手は一試合の中で、グー、チョキ、パーの使用頻度を平均化したいという潜在的な欲求が働いており、それが強すぎると、試合の流れに関係なく手が荒れ、敗戦に追い込まれたり苦戦を強いられるケースがあることを実験的に証明した（潜在的平均化傾向）。

81年、猿井戸を筆頭とした4人の研究者の連名で一本の論文が発表される。それは、ある特定の選手の手合いのデータから、その傾向と対策を浮かび上がらせる論理及び手法の考察というものだった。その際ひとりのプロ選手が実例として匿名で挙げられている。猿井戸は研究発表の場において、同じ手法で既に20名の現役選手の分析を行ったことを明らかにした。この「攻略本」が、いわゆる「猿井戸ノート」として物議を呼ぶ。

猿井戸ノートの存在が知られるようになると、選手間で不満の声が上がり始める。選手会はこのノートに正式に抗議を表明、研究センターに資料の破棄を求めた。そんな折り、猿井戸ノートに関して意見を求められたホットショット境田は、「ジャンケンには相手があってやるもので、学者がいくら対策を練ったところでそんなものは何にもならない。なんなら、自分の資料は公開していい」と発言する。それからしばらくして、ジャンケン界にある噂が囁かれるようになる。研究センターの閲覧室に、ホットショットの「攻略本」が置かれているというのだ。その噂に関して当時の所長・鈴木節夫は記者からの質問を受けて、「うちにはたくさんの資料がありますから」と、否定も肯定もしなかった。当時、選手会と研究センターは八百長騒動以降の反目関係が続いており、マスコミを介しての「売り言葉に買い言葉」の応酬が度々繰り上げられていた。

82年の春から、ホットショットはにわかに調子を崩し始める。大会からは早期に敗退するようになり、その負け方も暗澹たるものになっていく。9月に参加した3つの大会を全て初戦で敗れ、合計で1セットしか奪うことができなかった。ホットショットは利き手を左手にしてみたり対策を試みたが、以前の輝きを取り戻すことはできなかった。結局84年、シーズン終了を待たずしてホットショットは引退を表明する。

「（ノートは）関係ないです。あったってそんなのに頼らないでしょ。みんなプロなんだから」（ホットショット引退記者会見）

翌年の3月末日、猿井戸は研究センターを退職している。同じ時期に、研究センターはジャンケン協会に猿井戸ノートの破棄を報告している。

「イドさんがいると練習がきつくて。イドさんがそこにいるってだけで何倍も疲れた」（村田二男）

猿井戸は再びアマチュアの現場に戻り、生涯ジャンケンの世界に身を捧げた。「石みたいにコチコチ」と、妻の牧江は60年連れ添った夫を評す。研究センター採用時、特別待遇として助教授の就任を要請されていたが、「何の功績も残しておりませんので」と、コネを使ってまでそれを固辞した。私生活では、「選手が命懸けでやっていることだから」とジャンケンは一切せず、いつもコイン投げ用の500円玉をポケットに入れていた。

2011年、急性肺炎にて死去。牧江は遺品の中から数枚のMOを発見するが、直ちにこれを処分している。

「ぼくは死んだ途端に死にたい。誰かの心にいつまでも居座るようなことはしたくない」（「釣り与人」2003年秋号）

1968年、広田圭司の長男として生を受けた時点で、彼のその願いは永遠に叶えられないことが運命づけられた。「神様」の二世の誕生に、当時世の中はちょっとした熱狂を見せた。赤ん坊の頃からメディアに「神童」として取り上げられ、幼稚園児のときに書いた「ジャンケンのひとなりたい」という題の作文が新聞に掲載されると、ジャンケンファンならずとも彼の行く末に思いを馳せずにはいられなかった。12歳でのジュニアトーナメント初参戦、15歳でのA D O入団など、節目節目にはカメラが彼の周りを取り囲んだ。85年にジャパンカップを獲得し、弱冠17歳で年間最優秀選手に選ばれると、気の早い関係者からは「神様越え」の声が聞かれるまでになる。

グランドスラムこそ達成できなかったが、真田記念2回、ゴールデントーナメント3回、鳳凰杯1回、ジャパンカップ2回の優勝歴は、決して汎用な選手の残せる結果ではない。しかし、何年もの間超人的な強さで他の者の追随を許さなかった父の残影の前に、司の活躍は実質以下に捉えられてしまった感がある。周囲の過度の期待に応えようと急いだ為か、彼の選手としてのピークは比較的早く訪れてしまった印象が否めない。96年以降の4大会ではベスト8以上に勝ち進むことができず、97年からは手首の怪我にも悩まされ、シーズンを通して活躍することが難しくなっていた。98年に催された世界選抜との親善大会では日本代表の一人に選ばれながら、10人中唯一の敗戦を喫し、早過ぎる衰えを露呈した。99年、31歳という若さで「息切れを感じて」引退を決意する。引退記者会見で、「（父のように）復帰はしません」ときっぱりと宣言した。

引退後A D Oのフロントに入るが、2年を待たずして職を辞す。その後、長野の山奥でペンション経営を始めると、悠々自適な隠居生活、本人曰く「ストレスゼロの人生」を追求し始める。もともと趣味は多彩で、特にアウトドア関係には精通していた。父の影響で始めた登山は40歳を前に百名山を踏破し、川専門だった釣りは業界誌に連載を持つほど入れ込んだ。スキーは指導員クラスの腕前で、スキューバダイビングやハングライダーも好んだ。「人生は楽しむもの。楽しくないことはなるべくしないのに限る」。これは司が釣り雑誌に寄せた言葉だ。隣のページには、イワナを片手に満面の笑みを湛えた写真が載っている。

現役の頃には面倒見のいい先輩で、若いチームメートの相談役として頼られる存在だった。「驕ることがなく自然体で、入ったばかりの新人にも壁を作ることなく気軽に話しかけていた」と後輩の倉内信之は語る。

その倉内が失踪騒動を起こした際に頼ったのも司だった。司は自分のペンションに倉内と彼の恋人をかくまい、マスコミから彼らを守った。2人の所在を尋ねる電話取材に対して、「知りませんし、知っていてもあなた方には申し上げません」と毅然と答えた。一方で、「自分が一番大事なものは分かるが、自分だけ良ければいいというのは違う」と倉内を諭しもした。

2010年秋、司は4人のパーティで剣岳登山へ出かける。剣岳は彼のお気に入りの山のひとつで、既に3回登頂した経験があった。ライターだった妻の彩が東京での仕事を終えて何日か振りに帰宅すると、テーブルの上に宿泊する山小屋の住所の書かれたメモが置いてあった。ふと嫌な予感がした彩は、携帯電話を持っていない夫からの連絡を待ち、家に籠る。しかし、彼女が再び夫と言葉を交わすことはなかった。11月20日、司は小窓尾根を縦走中に滑落すると、およそ30メートル下の岩場に落下。ヘリコプターによって救助され病院へ搬送されるが、既に脳挫傷により亡くなっていた。

1941年兵庫県明石市生まれ。

17歳のときにグラスホッパーと契約するが、最初の待遇は2年間の研修生というものだった。限られた大会に出場する際の遠征費以外はチームからの支給はなく、朝は4時から新聞配達、午前は喫茶店で卵を焼き、午後は夕方6時まで練習、夜はおしぼり工場で、繁忙期には日をまたぐまで働いた。関西、関東のリーグで徐々に結果が出るようになると、21歳で晴れてプロ契約を結ぶ。が、なかなかそこから這い上がることができない。初めて獲ったタイトルの賞金は、僅か20万円だった。そのとき塩原は26歳、平日にはスーパーでレジを打っていた。

68年、春に2つの大会で優勝すると、鳳凰杯の出場権を得る。初戦を突破すると、2回戦の相手は広田圭司だった。1セットは何とか奪うも、傍目にも力の差は歴然、横綱相撲で寄り切られる。優勝した広田は、大会通じての一番の難敵を聞かれ、「2回戦の田舎チョキの人です」と答えた。このとき広田は塩原の名前をまだ覚えていない。

塩原の特徴は、その頃使い手がめっきりと減った田舎チョキだった。コーチから標準チョキに直すように注意されても、体に染みついたフォームを変えることによる副次作用を恐れた。その田舎チョキが人々の耳目を引いたこともあり、塩原の名前がちらほら聞かれるようになると、それに呼応するように成績のほうもついてくるようになる。69年には4大会全てにおいてベスト8以上に勝ち進み、派手さはないが堅実な手筋は目の肥えた者を唸らせた。

70年2月、ジャンケン協会理事会においてある規定が承認される。これまで曖昧だった手の型を定義、文言化し、全国的に統一を図るというものだ。それによるとチョキは、「人差し指及び中指をお互い十分に離れた状態で伸ばし、薬指及び小指の第一関節より付け根に近い部分を親指の腹で押さえ（中略）このとき人差し指及び中指は親指と完全に離れた状態にあるものとする」とされた。これにより、田舎チョキはチョキではなくなった。

充分に予想されたこの「変革」に、塩原はついていけなかった。春に出場した大会では、1試合に10回以上の反則を取られることもあり、追い込まれてゲーとパーだけで試合をしたこともあった。シーズン後半は出場予定だった大会の半分以上に不参加、「手が痙攣するほど」チョキを出し、フォーム矯正の訓練に時間を費やした。

70年の8月、塩原は一念発起、活躍の場を海外へ求める。本人はその理由を「パスポートを作ってみたかったから」とごまかしたが、明らかに国内での居場所を失ったからだった。初年度は貯金を切り崩しての「修行の旅」。当時はまだ恋人だった恵に仕送りまでしてもらった。韓国でひとつタイトルを獲ると、翌月にはヨーロッパへ飛んだ。オーストリアに丸2年滞在し、トップランカーとして活躍。年間最優秀選手にあたるヴァスティッチ賞を授かっている。ちなみにヨーロッパ国籍以外の選手でこの賞を受賞したのは、後にも先にも塩原龍男ただひとりである。

73年の春、桜前線と共に帰国した塩原は、32歳になっていた。日本ジャンケン界に復帰した塩原は、その年のジャパンカップにおいてキャリアの集大成を見せる。もう反則をとられなくなったチョキを駆使して勝ち進むと、準決勝の対戦相手は広田圭司だった。試合前、果たして広田はその対峙した相手があのかの「田舎チョキの人」だと気付いていただろうか。塩原はフルセットの激闘の末、広田を下す。

「やるだけのことは全部やったつもりです」（広田、試合後記者会見）

この席で、広田は1年後の現役引退を明言する。

決勝の相手はその年既にトリプルを達成していた祖父江知宏だった。祖父江は塩原にグランドスラムを阻まれた決勝戦後の記者会見、「いい試合だったんじゃない？」とだけいい残し、早々に会見場を去っていった。

塩原は39歳まで現役を続けるが、ジャパンカップ優勝以降はビッグタイトルには縁がなかった。引退後は元NACコーチの余語茂らと共に新規プロチーム、ホットスパー・トレーニング・クラブを創設した。

98年、肝硬変により死去。医師から重病だと告げられても、妻の恵を含め、周囲には何もいわなかった。頑なに入院を拒否し、死期を早めた。「病院嫌いでしたから」と恵は笑う。遺書には、「葬式はあげなくていい。恵と余語さんだけ知っていてくれればいい」と書かれていた。

1949年青森県弘前市生まれ。

21歳のとき、東北リーグでのプレーがNACのスカウトの目に留まりプロの道へと進む。ジャンケン選手としては少々オーバーウェイト気味の「ユーモラスな」体型をした小本正剛は、愛嬌のある東北訛りも手伝ってか、人気の高い選手のひとりだった。75年真田記念で優勝すると、遅れてきた新人は「祖父江以降」の覇権争いに名乗りをあげた。

76年、前月の鳳凰杯で2つ目のビッグタイトルを獲った小本は、その勢いを維持したままジャパンカップへと乗り込んだ。準決勝、佐々木望に「光速で飛んでくる肉団子」と憎まれ口を叩かせるほどに圧倒して勝利すると、後に「昭和の名勝負」といわせしめた決勝、谷誠戦に臨む。

決勝戦のスタッツを見ると、とにかくタフな試合だったことが窺える。試合時間は3時間を超える長丁場、アイコは53回に及び、デュースは27回を数えた。2人の補給した水分の合計は30リットルといわれ、谷はこの試合の前後で体重が4キロ減った。第7セットで審判が貧血により倒れて交代している。結果はフルセットの末、2度の逆転を見せた小本の勝利。試合が終わった途端、両者はサークルの中に座り込み、あぐらをかいたままネクタイの交換をした。「今世紀ベストゲームのひとつとしてこの小本―谷戦を付け加えることに、多くの方は諸手で賛同してくれるでしょう」。江藤泰士は興奮した口調で中継を締め括った。

その僅か5ヶ月後、あの八百長騒動が持ち上がる。きっかけはある建設会社の絡んだ贈収賄事件だった。会社役員の自宅捜索で1冊の大学ノートが応酬され、そこに書かれていたのが、いわゆる「神の盤」であった。その建設会社と暴力団の繋がりが明るみに出ると、ジャンケン選手38名、審判8名を含む総勢100人以上のジャンケン関係者が聴取を受けるという大スキャンダルに発展していった。小本は唯一、自ら八百長への関与を認めたジャンケン選手である。彼の証言によれば、小本は過去3年のうちに計4試合で故意に敗戦し、その見返りとして金銭を受け取った。協会はその4試合の内訳の公表を避けたが、それがかえって過熱報道を煽り、ジャンケンの格を下げた結果になったことは否めない。この騒動により、小本正剛はジャンケン界を追放され、獲得したタイトルは全て剥奪、当然、ジャパンカップのタイトルも失った。

「私が（ファンを）裏切ったのであり、ジャンケンが裏切ったわけではありません」（77年7月記者会見）

その翌年から小本正剛の消息が途絶える。88年の冬、都内の路上生活者の為の炊き出しのテントで、11年振りに小本の安否が確認される。その姿は全盛期の巨漢は見る影もなく、彼を発見した元チームメートは、小本の余りの変わりように、彼の目の前を3回往復したという。旧友たちの尽力により小本は住まいを得るが、その後も食うや食わずの生活が続いた。

ある日、新聞勧誘のアルバイトの青年が小本宅を訪れる。「俺にジャンケンで勝ったらとってやる」と、小本は青年に3回勝負を挑む。青年が勝つと、「男と男の約束だ」といって購買の契約を交わす。翌月、その青年が集金に訪れると、「ジャンケンで勝ったら払ってやる」といい、再びジャンケン勝負を挑んでくる。今度は勝利した小本は、「よろしく」とだけいい、戸をぴしゃっと閉める。仕方なく青年がひと月分の代金を立て替える。翌月もまたジャンケン3回勝負、今度は青年が勝つ。すると小本は「どうやったんだ？」と払うのを渋ったが、予め封筒に入れて用意されていた代金を彼に渡すのだった。その2人のやりとりは1年続き、小本の5勝7敗だった。

2008年8月、様子を見にきた家政婦によって、小本の遺体が発見される。死後四週間が経過していた。死因は頭を強打したことによる脳出血。戸口の鍵が開いていたことから殺人の疑いも出たが、椅子から転倒したことによる事故死ということで捜査は打ち切られた。遺体が発見された日は、小本の59回目の誕生日だった。

小本のタイトル剥奪により、ジャパンカップのタイトルは繰り上げにより谷誠が得た。しかし谷は、「小本さんから預かっているだけです」と、それを経歴には加えなかった。また江藤泰士は、騒動以降、半ばなかったかのように扱われた76年ジャパンカップ決勝戦を、「最も感動した試合」として語り続けた。

私の手元に1枚の写真がある。1975年ジャパンカップ決勝のワンシーンを俯瞰で捉えたものだ。写真の右側には、当時NACの次期エース候補のひとりだった山田与志男の、正面やや斜めを向いた膝から上の姿を、左には、この試合の後「盗人」と呼ばれた金田治の姿を背中から収めている。中央には、輪郭が少しぼれてはいるが、お互いの繰り出した手がはっきりと見え、手を合わせた瞬間だと分かる。山田の手はパー。手の平が上を向いた状態で、5本の指がはっきりと見える。金田の手は、公式記録ではチョキとされている。しかし、写真には、金田の人差し指しか写っていない。もし仮にこれが1本の指だけで成っている手であるとするならば、それは反則とみなされ、山田にポイントが加点されていた。即ちこの時点で、益平伝右衛門像は山田与志男のものになっていたわけだ。

1945年岡山県岡山市生まれ。

デビューした頃には「服部正平の再来」と期待された金田治は、72年ゴールドトーナメント以降、主要タイトルには手が届かず、その焦りを試合中にも隠すことができなくなっていった。相手の遅出しに必要に抗議したり、形勢が悪くなると負傷を装い、タイムアウトを連発して流れを止めたりするなど、なりふり構わず勝利を奪い取ろうとする姿に、観衆の心は徐々に離れていった。「ジャパンカップを勝ち取らなければ、ジャンケン選手としては三流だ」と口癖のようにいい、年末に行われるビッグイベントを目標の頂きに置いていた。

75年、金田は11月の鳳凰杯の出場を見送り、鹿児島で1週間の合宿をする。翌年の2月には31歳、現役としてのピークを感じていたのだろう。それほど翌月のジャパンカップは、彼にとって「勝負の大会」だった。しかしいざ開幕すると、気負いばかりが先に立ち、1回戦5-3、2回戦5-4と、格下相手に思わぬ苦戦を強いられる。やがて徐々に調子に乗ってくると、準決勝では有村佳純を逆転につぐ逆転で退け、初の決勝進出を決めた。この試合で、金田は遅出しのペナルティを6回受け、有村の遅出しに7回抗議、最長5分間試合を中断させた。試合の途中から会場にはブーイングが聞こえ始め、終盤には観客は完全に金田の敵に回っていた。しかし元来そんなことを気にするような男ではない。最終第9セット、勝利の色が濃くなってきた金田は、口元に笑みを湛える。そして勝利が決定すると、握手を求める有村を無視して、落胆ムードの観客席に向かって両の拳を突き上げた。

山田与志男との決勝戦、滑り出しは金田のペースだった。2セットを連続して奪取、3セット目も4ポイントリードした。しかしここで悪癖の遅出しで反則を取られる。判定に納得がいけない金田はしかしぐっと堪え、心を平静に保つべく深呼吸をする。しかしセット終盤でまた反則の宣告を受ける。今度は怒りを爆発させ、審判に猛然と詰め寄る。飛び交う野次の中、主審に注意を受けたコーチが金田をなだめる。これを機に相手の盛り返しを受けてポイントを失っていく金田は、第6セット途中で早々と4回のタイムアウトを使い切る。

最終セット、ポイントカウントは8-6で山田のゲームポイントだった。審判の右手が高々と掲げられる。息を飲む沈黙の後、両者の右手から手が繰り出される。その瞬間、山田は金田の反則をアピール、両陣営のベンチのスタッフが一齐に立ち上がる。しかし、審判は左手をあげ、金田のポイントと判定。ブザーも鳴らない。掲示板には「8-7」と表示され、その手合いの勝敗が確定されたことを示していた。山田陣営はこれに猛抗議、コーチのひとりが退席を命ぜられる。8分の中断の後、判定は覆らず試合は再開。完全に冷静さを失った山田はそのまま3連続でポイントを失い、栄冠を逃す。金田の優勝が決定しても、山田とスタッフは審判を取り囲み、問題の手合いの説明を求め続けた。そのすぐ横で、金田は床に突っ伏し、念願のタイトル獲得の歓びに肩を奮わせた。

その後、その手合いに関しては様々な検証が行われた。前述した写真がテレビに写らない日はしばらく来ず、人差し指しか立っていないのか、それとも中指は隠れて見えないだけなのか、医学や光学の専門家たちが持論を展開した。その手合いの審議すらしなかった審判団にも非難は及んだが、その過熱報道で醸成された空気は、「金田が勝利を盗んだ」というものだった。

金田はその後、八百長疑惑にも巻き込まれ、メディアからはほとんど「クロ」の扱いをされた。不用意な発言の数々も火に油を注いだ。騒動沈静後、メディア側を名誉毀損で訴えると息巻いた金田だったが、事態の軟着陸を望む所属チームの意向で提訴を断念した。79年に引退すると、彼はジャンケン界から未練もなく離れ、実業家として成功した。

2006年、心筋梗塞により死去。

1943年新潟県新潟市生まれ。

煎餅工場を営んでいた父は、馬場が13歳のときに亡くなり、多額の借金を妻と子に残した。一人っ子の馬場は中学を卒業すると、母の勤めるメッキ工場で朝から晩まで働いた。その工場の先輩に連れられていったアマチュアチームの練習場で、馬場は競技ジャンケンと出会う。チームのコーチから一冊の教則本を借り、その後暇があればページをめくった。返却するときにはどのページも煤や油まみれになっており、裏表紙はとれかかっていた。そのまま貰い受けたその教科書は、生涯彼の本棚に飾られていた。

71年、28歳になった馬場は既に妻を迎えており、その年に2人目の男の子が誕生している。仕事は機械部品工場の生産管理、肩書きは主任になっていた。ジャンケンは続けていたが、相変わらずの趣味程度、月に一度アマチュア大会に参加して、景品を貰ってはきては子供たちを喜ばせた。

後年、馬場は自分がなぜその年のジャパンカップ地方予選に出ることになったのか、はっきり覚えていないという。「いつものアマチュアの大会と思って参加しました。家族を連れて、弁当を持って。安上がりな行楽気分でしたよ」。経緯はどうあれ、馬場はこの地方予選で優勝。ジャパンカップ本戦の出場資格を獲得する。

馬場は東京で行われるジャパンカップ出場の為に、一週間の休暇を願い出た。「どうせすぐ負けるんだからそんなに長くは必要ないだろう」と上司は渋ったが、馬場は「念の為」と引かず、休暇願を引っ込めなかった。普段は滅多に休みを取らない勤勉な部下に、上司は繁忙期の休暇を許可した。馬場は鞆に妻から送られたネクタイと「ジャンケン入門」を携え、東京へと赴いた。寝泊まりは会場に近い親戚の家で世話になった。予備予選が開幕して5日目、出がけ妻に渡された遠征資金を追加請求している。

「誰でも少しの間、何をやっても勝てる時期というのがくるものです」

その時期の真っ只中にいた馬場は、見事に予備予選を突破、決勝トーナメント出場枠64の席のひとつを獲得する。アマチュアがこの座を勝ち取るのはそれほど珍しいことではない。しかし、そういった選手のほとんどがプロチームに所属する練習生か、もしくは実業団チームに所属するセミプロである。逆を返せば、そのような野心溢れる予備軍、加えて、何とかトッププロへの足掛かりを掴もうとする中堅プロ選手の蠢く予備予選を、自動車部品工場第一生産課主任・馬場英夫は全18試合全勝で突破したのだ。

馬場は決勝トーナメントへの出場が決定すると、会社に2日の休暇延長を請う電話をかけた。上司は「念の為」にこれを5日に延ばしている。馬場が妻に再度遠征費の無心の電話をかけたのはいうまでもない。馬場は決勝トーナメント1回戦で広田圭司と対戦。ジャンケン選手として最も完成度が高かった時期の広田から1セットを奪う健闘を見せるも敗戦。拍手で沸く会場に清々しい笑顔を残し、馬場英夫のジャパンカップは終わった。

その後、馬場はプロ転身を考えたことは一度もなかったという。逆に、サインを求められたり開会の挨拶を依頼されたり、煩わしいことが増えた為にアマチュアの大会からも足が遠退いた。

「あれ（ジャパンカップ出場）は夢だったんです。とても楽しい夢」

子供は合計4人授かり、孫は10人、全員馬場が生まれて最初に抱いたそうだ。48歳のときに圧縮機に挟まれる事故で、利き手である右手の中指から小指を失った。会社には68歳まで勤め、最後の肩書きは専務だった。退職後に子供たちの為にジャンケン教室を開いた。生徒たちにジャパンカップ出場の誉れを自慢するようなことは一度もなかった。ジャパンカップに出場した年に生まれた次男がジャンケン選手になりたいといったときには、「それこそ雷が落ちるように」怒ったという。その息子は今、父親と同じ機械部品工場で働いている。馬場が75歳で亡くなったときには、彼が喪主を務めた。

和田 俊哉

1952年三重県松阪市生まれ。

79年から82年の4連覇を含む5度のジャパンカップ制覇、81年グランドスラム達成、通算5度の年間最優秀選手選出。

私が記憶するに、「第2の広田圭司」と呼ばれたジャンケン選手は3人いる。ひとり「神童」広田司、もうひとり「巨人」祖父江知宏、そして「人間」和田俊哉である。

和田俊哉の選手生活は、度重なる怪我との「二人三脚」だった。76年に利き腕である左肘関節の手術をすると、78年、79年にも同じ箇所メスを入れている。80年には右脚アキレス腱を痛め、同じ年に今度は左の足首をやっている。怪我に伴う体のバランスの崩れから、腰痛と偏頭痛には慢性的に苦しんだ。これらの怪我は彼のキャリア形成の足を引っ張りもしたが、その悲劇性が彼の人気を持ち上げる要因にもなった。

85年、オフのトレーニングで左肩を痛めていた和田は、怪我をおして鳳凰杯に出場。準決勝前日記者会見の席に、フットボール選手のプロテクターのようなアイシングを肩に施して現れた。「(準決勝で対戦する竹内正信は)『化け物』らしいですからね。ぼくは人間なんで。人間らしいジャンケンをしたいです」。「人間らしいジャンケン」は、彼が好んで使ったコメントだ。

その年のジャパンカップ、準々決勝で敗退すると、既にそのシーズンでの引退を表明していた和田は、愛用した赤のネクタイを観客席に投げ入れる。はだけた首筋に肩の包帯が覗き見えた。観客は満身創痕のベテランの退場を、惜しみない拍手で送った。

ジャンケン選手は、というか、人間は、自分の人生を好きな時点で終わらせることができない。もしそうしたいのなら、もっとも輝いたその瞬間に、敏腕の狙撃手に頭を撃ち抜いてもらうしかない。

引退後、和田は所属したADOなどで指導者としての修行を積み、91年、自身のプロチーム「正統塾」を設立する。元スター選手の立ち上げたチームということで注目を浴び、新規団体としては破格の資金を集めた。一時は最大80名を超える選手を抱え、発足して僅か数年で、他のトップチームに肩を並べる規模にまで成長した。

95年、和田は現役時代から続いた女優の原田みゆきとの結婚生活に終止符を打った。その2ヶ月後に再婚するが、そのまた2ヶ月後に離別している。その年の暮れ、正統塾所属の17歳の練習生が、トレーニング中に亡くなるという事故が起こる。警察はチームの関係者に事情を聴取した。マネージャー兼ヘッドコーチの和田もその中に含まれた。死因は当初心臓発作とされたが、取り調べが進むにつれ、それが上級生による「指導」という名の暴行によるものということが判明する。その「指導」は日常的に行われており、その存在を黙認した罪を責任者の和田は問われた。

最初、和田が起訴される確率は五分五分、仮に有罪になっても執行猶予付きだろうと世間は予想した。しかし、関係者の証言からその「指導」を和田自身が指揮していたことが判明、更に、元妻の原田が、夫婦生活において和田から受けていた日常的な暴力を暴露すると、状況は大きな傾きを見せる。世論に与える影響を鑑みた裁判所は一審で実刑判決を下すと、2001年に請求された上告を棄却。かつての花形選手、和田俊哉に懲役6年の刑が確定する。

和田は服役中、出所後に3人目の妻となる恋人に手紙を書いている。

「ぼくはこの苦難を乗り越え、きっとまたみんなの信頼を回復することができると信じています。だから君も汚い中傷には負けないで！」

「今は悪い時期なのです。何をやっても報われない時期なのです」

恋人が和田の名誉回復の為に公開した文面は、全くの逆効果となる。メディアは「ずうずうしい被害者意識」、「反省のかけらも見えない」と非難を強め、「『人間』の没落」という特集を組んだ週刊誌もあった。05年に出所した和田は、再び正統塾に心血を注ぐ。しかし、他チームへ移籍した田中雅臣との間で肖像権に関するトラブルを起こしたり、所属コーチが児童買春の条例違反で逮捕されるなど、再び世間の信頼を回復するには至らなかった。

2010年冬、夜半過ぎに和田宅で火災が発生する。和田は妻に起こされて一旦は外へ避難するが、「忘れた忘れた」と叫び、再び火の燃え広がる家の中へと戻っていった。火は数時間後に消し止められたが、家は全焼、両隣の家に半焼の被害を与える大火事だった。焼け跡から和田の遺体の一部が発見された。出火の原因、加えて、和田が何を取りに家へ戻ったのかは不明である。

1965年神奈川県横浜市生まれ。

両親ともに教師の家庭に生まれる。中学の頃からジャンケンを始め、高校で日本一に輝いている。卒業後、トッププロチームの争奪戦の末、中堅グラスホッパーに入団したことは関係者を驚かせた。85年ゴールデントーナメントで優勝し、グラスホッパーに初のビッグタイトルをもたらすと、その年の鳳凰杯、更にジャパンカップも制し、年間最優秀選手賞を受賞。翌年には史上最年少でのグランドスラムを達成する。その後も勢いは衰えを見せず、87年、88年と3年連続での「完全制覇」の偉業を成し遂げる。

88年にチームスタッフの女性と結婚、翌年には長女を授かっている。私生活の充実に伴ってプレーに更なる成熟が感じられるようになると、竹内の「長期政権」の予感が支配的になる。89年のシーズン開幕にあたり、その年の展望を求められた江藤泰士は、「対抗馬はいない。恐らく数年間、竹内の一人勝ちは続くだろう」とのコメントを残した。しかし、その年の春頃から、竹内の周辺はにわかに騒がしくなる。

5月、竹内は福岡の大会に姿を現さず、市内のホテルから地元の女子大生と出てくるところを目撃される。更に、同じシーズン中にタレントのいわさきまみとの不倫騒動が持ち上がると、鳳凰杯の記者会見で、それを認める発言をし、報道陣にもみくちやにされながら会場をあとにした。翌年2月に離婚が成立したときには、妻のお腹には2人目の子供が宿っていた。90年には女性トリオ「プチガールズ」の浅倉エトと婚約するが、竹内の浮気が原因で破局、同年、別の女性との間に隠し子がいることが判明するなど、当時の竹内は叩けば叩くだけ埃が舞い出た。92年には横浜の路上で同級生の男性に暴力を加えて顎の骨を折る大怪我をさせ、1年間の活動自粛を余儀なくされた。復帰後は再び輝きを取り戻すが、ときどき発作的に起こす謎の行動（92年には年間最優秀選手の授賞式を無断で欠席してネパールを旅していた）は、スタッフを困らせた。しかし、出場する試合では圧倒的な存在感を見せた。95年1月に開催されたロイヤルリーグでは、9戦9勝という圧巻の強さで他を圧倒、第1回大会の優勝者として名前を記録した。

今回、これを著すにあたり、当時のジャンケン専門誌に掲載された竹内のインタビューをあさってみた。彼の「アウトロー」ぶりを示すようなコメントを期待していたわけだが、どこにもそのような発言は残っていない。というかむしろ優等生的な発言が目立つ。初のグランドスラムを達成した直後には、その要因を「まぐれ」といい、己を律する謙虚なコメントに終始している。また彼の「奇行」が目立ち始めた90年のインタビューを見ても、自身の一連の行動を「甘え」と断じ、チームメイトやスタッフに対する感謝の言葉が目立つ。しかし、その理路整然とした澁みない受け答えの中に、ジャンケンに対する冷めた感情が見え隠れする。89年ジャンケンマガジン2月号では「もう少しやったら、もういいかなって思うこともあるかも知れない」ともこぼしている。

95年、竹内は3月のジャンケンダイジェストに、「今年の目標は4大会制覇。これにつきます」と豊富を語っている。

5月、前月の前哨戦で既に2勝をあげた竹内は、チームから1週間のオフを与えられる。8日に横浜の実家に顔を出すが、その晩には下北沢の自宅へ戻っている。9日の夜、竹内はホットスパ・トレーニング・クラブの練習場に塩原龍男を訪ねる。塩原は不在で、戻ってくるまで練習を見学する。塩原が戻ってくると、彼の勧めで練習生に混じって1時間ほど汗をかく。塩原が食事に誘うと、竹内は、用事がある、と断る。竹内は用事の内容を口にしたが、塩原は覚えていない。2人は練習場内で30分ほど話す。塩原は「真田記念は出られるのか」と竹内に尋ねる。2月に手術した肘を気遣ったことだ。質問した当人も忘れるくらい長い間の後、塩原さんはどうしてほしいです？ と竹内は逆に問うてくる。塩原は、「それは俺の決めることじゃない」と笑って答える。そうか、そうですよね、と竹内はいい、腰を上げる。長居したことを謝し、彼は練習場を去る。そのときの様子が気になった塩原は、夜中に竹内の家に電話を入れている。

その夜、竹内は自宅には戻らず、自宅のすぐ近くのビジネスホテルにチェックインしている。夜中、ホテルの電話からいくつかの外線をかけている。従兄弟には年賀状の礼をいい、昔のチームメイトには外国為替について尋ねている。夜中の2時には時報案内にも電話している。死亡推定時刻は明け方5時から6時の間と見られている。竹内は浴室の照明にタオルをかけ、首を吊って自殺した。

別冊ジャンケンダイジェスト

<http://p.booklog.jp/book/91430>

著者：はやし

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hayashinobunari/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/91430>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/91430>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ